

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月11日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520235

研究課題名（和文）「長い十九世紀」における人間の移動と想像力の観点からの学際的ユートピア研究

研究課題名（英文）An Interdisciplinary Study of Utopian Discourse in the "Long Nineteenth Century" from the viewpoint of Human Transposition and Imagination

研究代表者

川田 潤（KAWATA JUN）

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：70323186

研究成果の概要（和文）：本研究は、いわゆる「長い十九世紀」と呼ばれる時期のユートピア言説を、人間の＜想像力と移動＞という視座から考察することで、この時期のユートピアを、ディストピアに至る途中過程としてではなく、多様な可能性をもった創造的言説として捉えた。具体的には、（1）この時期の等閑視されていたユートピア作品も含めてユートピア作品を蒐集・整理し、（2）コロニー建設などの具体的な移動と、想像上の移動の観点から（1）を検討し、（3）ディストピア的傾向と同時に、従来と異なるユートピア的性質も同時に生み出されていたことを確認した。

研究成果の概要（英文）： This study clarified creative characteristics of the utopian discourse in the "Long Nineteenth Century" through reexamining them from the viewpoint of human transposition and imagination. Though utopian texts in the nineteenth century have been regarded as dystopian, they can be interpreted as creative discourse with heterogeneous possibilities. I conducted this study in the following three steps: (1) Collecting disregarded utopian texts in the age. (2) Examining (1)'s texts through the viewpoint of actual / imaginary transposition. (3) Clarifying not only dystopian characteristics but also different and new utopian characteristics in them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学・英米文学

キーワード：ユートピア、社会主義、帝国主義、移動、想像力、長い十九世紀

1. 研究開始当初の背景

従来のユートピア思想／文学研究において、十九世紀は、その最盛期であると同時にその終焉に向かう時期でもあるとされてき

た。このような研究では、「社会主義」の理念に基づくユートピアが大量に生み出されることで、ユートピアというジャンルは理想とする社会システムの青写真へと固定され、その結果、ディストピアへと変貌していくと

される。大量のユートピア言説間の差異は、未来を夢見るエドワード・ベラミーと過去を懐かしむウィリアム・モリスのように顕著な場合は例外として、ほとんど省みられないか、作家研究、優生学、精神分析、帝国主義などの観点から個別に扱われるのみで、相互の関係性が十分に考察されることはなかった。

研究代表者は、これまで、＜社会主義の多様性とユートピア＞という観点からユートピア思想史の見直し、十七世紀後半から十八世紀にかけての自然に対する人間の眼差しとそれに基づく知の体系の形成という観点に基づくユートピア思想の再検討、そして、「長い十八世紀」の等閑視されてきたユートピアについて、「過剰の時代」として十八世紀を捉え、狭義の諷刺文学としてのユートピア像の見直しを行ってきた。

本研究は、これらの研究の延長線上にあたるもので、これまでの自然、主体、理性、過剰という問題系を用いつつ、時代を「長い十九世紀」に移し、過去の多様なユートピアの可能性がどのように受け継がれ／断絶し、変容しているのかを探り、この時期のユートピアの多様性とその相互関係を明らかにすることを目的とした。また、「移動」という視点を加えることにより、十九世紀の植民地・帝国主義下のグローバルな移動の時代において、実際の移動をともなうユートピア計画が、どのような状況で想像／創造されたのかにも注目した。

2. 研究の目的

本研究は、いわゆる「長い十九世紀」と呼ばれる時期（1789年～1914年）のユートピア言説を、人間の＜想像力（イマジネーション）と移動（トランスポジション）＞という新たな視座から考察することで、この時期のユートピアの異種混濁性を明らかにし、ディストピアに至る途中過程としてではなく、多様な可能性をもった創造的言説として捉えることを目的とした。

本研究は、「長い十九世紀」におけるユートピア言説の多様性を、グローバルな移動が活発になった時代において、「長い十八世紀」から形成され始めた近代的な主体が、どのように想像／創造したかを明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の4つの項目を明らかにすることを目的とした。（1）「長い十九世紀」のユートピアに関する理論整序とそれにもなう理論的基盤の見直し（2）「長い十九世紀」のユートピア言説の蒐集と分類（等閑視されてきたユートピアの再発見と整理）（3）（1）と（2）に基づくテキスト分析とそれにもなうユートピア思想史の修正（4）ユートピア思想の学際性の（再）確認。

3. 研究の方法

本研究は以下のような方法で行った。

全体としての研究の方法は、「長い十九世紀」におけるユートピア言説の一次資料の読解・収集・整理、二次資料を用いた理論（ユートピア、主体、グローバリズム）の見直し、それらをもとにしたテキスト分析、全体総括という流れである。

具体的には以下の手順である。（1）～（4）については、上記の、「一次資料の読解・収集・整理」と「二次資料を用いた理論（ユートピア、主体、グローバリズム）の見直し」、「テキスト分析」が相互に関連している。

（1）「長い十九世紀」のユートピアに関する理論的整序。

具体的には、まず、「長い十九世紀」を主な対象としたユートピア思想に関係する書籍を図書館等に所蔵のものを確認の上、必要なものを収集し、その理論的背景を整理、検討した。次に、「長い十九世紀」を扱うための歴史的、社会学的な理論研究書、とりわけ帝国主義、植民地主義関連について書籍を収集し、理論的な基盤を構築した。更に、十九世紀に誕生し、発展した人間の精神と肉体との関係を探る学問分野の歴史的背景についての書籍を収集し、当時の人間主体に関する考え方の基盤を理解した。

（2）「長い十九世紀」ユートピアに関する一次資料の収集・整理。

具体的には以、まず、これまでの研究に基づいた図書館所蔵のものも活用しつつ、不足する出版資料を収集し、更に、十九世紀ユートピア言説のテキストを現在出版されているものだけでなく、絶版になっている書籍、および電子テキストとなっているものを可能な限り収集した。次いで、テキストを、スキャナ等で読み取り、可能限り、OCRによって全文検索可能なデータとした。その上で、いくつかの代表的なテキストを精読することにより、複数の基本的な構成要素（移民／ネイティブ、国家／集団、混濁／純血、等）を抽出した。

（3）ユートピア言説の理論整序に基づく、テキストの具体的な読解。

（1）、（2）の成果に基づいて、さらに、本研究に独自の視点である移動と想像力とユートピアという観点から、具体的な分析を行った。まず、理想的コロニーの建設のため

に異なる環境へと移動した人々の実践と理論の変化をたどり、その際、単に、理想の挫折としてではなく、理想の変化、転化に注目した。また、次いで、想像力とユートピアという観点から、想像力とユートピア的衝動の関係を探り、ユートピア言説を、創造・改変の力としてとらえる可能性を探った。更に、社会主義的ユートピアの詳細な分析を、社会主義的ユートピアを、よりきめ細やかに見ることで、単純に社会主義 vs. 反社会主義という対立では整理ができないことを確認し、その多様性を明示した。

(4) ユートピア言説の学際性の再検討を、文学以外の(ユートピア的衝動をもつ)テキストから分析。

具体的には、政治パンフレット等におけるユートピア的衝動、経済論文等におけるユートピア的衝動、文化的(音楽、絵画、そして映画等の大衆文化)の諸言説におけるユートピア的衝動について検討を行い、それを(3)での成果と比較検討を行った。

(5) 総括

(1) ~ (4) の作業をまとめて、全体を総括。

4. 研究成果

本研究は、いわゆる「長い十九世紀」と呼ばれる時期のユートピア言説を、人間の〈想像力と移動〉という新たな視座から考察することで、この時期のユートピアの異種混濁性を明らかにし、ディストピアに至る途中過程としてではなく、多様な可能性をもった創造的言説として捉えることができたと考えている。成果は大きく以下の三点のようにまとめることができる。

(1) 十八世紀と十九世紀の連続性を考えることで、「理性と過剰の時代」としての十八世紀でのユートピア言説が、十九世紀にも流入していることを確認した。とりわけ、しばしば、具体的・現実的な設計図的なユートピア言説としてとらえられてきた十九世紀のユートピア群の中に、政治的ではない(社会主義運動とは異なる形での)過剰(過激)な非統一的(分裂的)・非具体的(実現不可能性)な要素が入り込んでいたことを確認した。

(2) グローバルな移動が可能になった時代という観点からこの時代のユートピアを考察することによって、この時期、確かに国家全体について考察を加えた社会主義的なユートピア言説が多数出現しているものの、同

時に、小規模の移動グループを想定した限定的・特殊なユートピア言説も誕生していることを明らかにした。

(3) (2) のグローバルな移動の時代という観点に、実際の移動ではなく、想像上の移動という観点も加えて、この時代のユートピアを考察することによって、SF的な設定も含め、従来のユートピア言説では想定されてこなかった設定が作り出され、共同体言説だけでなく、(異なる)主体についての言説が大きく変化しつつあった状況を明らかにした。

以上、三点から成果から、従来のユートピア思想に基づくユートピア文学ジャンルの形成から排除されてきたテキストを射程に入れ、「長い十九世紀」ユートピアの異種混濁的な性質を確認できた。現在、その包括的な成果をとりまとめている最中である。

3で述べた研究方法毎にまとめた具体的な作業と、その成果は以下のようになる。

(1) 「長い十九世紀」のユートピアに関する理論的整序。

- ① ユートピアの終焉などについて論じられたユートピア思想に関する理論の再検討を行い、終焉ではなく、新たな可能性も萌芽していた可能性を〈希望の原理〉として読み取った。
- ② 帝国論などを視野に入れることで、社会学、歴史学に関する理論の研究の結節点としてのユートピア研究の有効性を確認した。
- ③ ジュディス・バトラーなどのジェンダー論を含んだ主体論、心理に関する理論の再検討に基づき、十九世紀に生じた主体という概念の変化を明らかにした。

(2) 「長い十九世紀」ユートピアに関する一次資料の収集・整理。

- ① 新しいユートピア言説群の発掘、調査を、主にスタンフォード大学の電子テキスト、ニューヨーク市立図書館などから蒐集した。
- ② 作品群の分類・整理を、マルクス主義、非マルクス主義的社会主義などの観点から、行った。
- ③ テキスト分析と基本要素の検討と整理し、富の分配、労働、心理、幸福論などの要素の検討を行った。

(3) ユートピア言説の理論整序に基づく、テキストの具体的な読解。

<ユートピア的衝動>という観点に注目しつつ、具体的なテキスト分析をより綿密に行った。まず、理想的コロニーの建設のために異なる環境へと移動した人々の実践と理論の変化をたどり、理想の挫折としてではなく、理想の変化、転化に注目した。次いで、想像力とユートピア的衝動の関係を探り、収集したユートピア・テキストを閉塞的ではなく、創造・改変の力としてとらえる可能性を探った。そして、社会主義的ユートピアを、よりきめ細やかに見ることで、単純に社会主義 vs. 反社会主義的な対立では整理ができないことを確認し、その多様性を示した。

(4) ユートピア言説の学際性の再検討を、文学以外の(ユートピア的衝動をもつ)テキストから分析

文学以外の(ユートピア的衝動をもつ)テキストを分析し、(3)の研究を補完した。具体的には、政治言説(社会主義との関連)、経済言説(資本主義およびその批判について)、文化的言説(美術、娯楽について)のテキストとの関係性を考察した。

(5) 総括

<移動と想像力>という本研究の主要な観点からの研究の総括を行い、遠距離の旅行が多くの人にとって物理的に可能になりつつあった時代における主体および大衆の想像力の変貌の過程を辿った。

具体的には、十九世紀をユートピアがディストピアに変貌する過程として捉える従来のユートピア文学・思想史が不十分であることを以下の2点において明らかにした。①文学におけるキャノン以外のテキストにはこの時代にも十分にユートピア的なものが存在していた。②ユートピア思想においても、まさに、この時代こそ、ブロッホへといたる希望の原理としてのユートピア思想が登場するさまざまな契機が存在していた。

以上のような総括を踏まえ、現在、個別のテキストに関する論攷を準備しているところである。その際、とりわけ、③(原)サイエンス・フィクションのテキストの登場過程とそこにおけるユートピア思想の多様性、④進化論の多様性とその非優生学的な可能性の変遷を扱ったテキスト群、という二つの方向でテキスト分析を進めている。

まとめ

先述した通り、十九世紀のユートピア言説は、社会主義からディストピアへというように、限定的にとらえられることが多く、従来のユートピア思想に存在していた、さまざま

なユートピアの可能性が形を変えて存続していたかどうかの検討は十分ではなかった。本研究では、「長い十九世紀」に存在していた、「長い十八世紀」からさまざまな形で継承した／否定した、多様なユートピア的衝動に基づいたテキストを発掘／再評価した。さらに、人間の物理的・精神的な移動と想像力の関係を考慮することによって、越境的な思考と閉鎖的な思考という国家と主体の関係性を考察することができた。

その結果、①十九世紀ユートピア思想の豊穡性の確認に伴うユートピア思想史の見直し ②移動と人間の想像力との関係の解明 ③グローバル／ローカルという対立の顕在化の原因とそこからの脱却の可能性の提示、という3点の成果が上がり、このような作業を通じ、ユートピア思想を再創造／想像できたと考えている。今後は、この成果を生かし、現在のグローバルな状況の中でのナショナリズムの問題を考察し、さらなるユートピア思想の意義を考察したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

① 川田潤 「シェイクスピアに恋して—Margaret Cavendish と Originality の問題」第50回日本シェイクスピア学会 2011年10月22日 聖心女子大学

② 川田潤 「科学、帝国、ユートピア——Joseph Banks と旅と蒐集」第65回東北英文学会シンポジウム『蒐集と想像のイギリス文化史』2010年9月26日於仙台白百合女子大学

[図書] (計1件)

① 川田潤 「理性と空想／真実と虚構—初期王立協会と自然哲学の専門化／大衆化—」pp.79-98、『十七世紀英文学と科学』十七世紀英文学会編、金星堂、2010年、全272頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川田 潤 (KAWATA JUN)

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：70323186